

阿弥陀堂内陣 彩色工事の材料たち

阿弥陀堂内陣の彫刻彩色で使用されている顔料・染料^{*}は貝殻や鉱物、植物からできており、色の種類は大きく分けて白・赤・青・緑・黄です。鉱物から作られる絵具は粒子の大きさによって色合いが異なり、粗くなるほど色が濃くなり、細くなるほど色が淡くなります。天然の鉱物、植物を用いるため、独特の深みのある色が特徴です。

今回の修復では、古くから日本画で用いられてきた顔料・染料と膠を混ぜる彩色技法が用いられています。

^{*}着色に用いる粉末で水や油に不溶なものを「顔料」、着色に用いる粉末で水や油に溶けるものは「染料」と呼ばれています。



膠 牛のコラーゲンを濃縮し、固めて乾燥させたものです。水と混ぜ、膠水として絵具を接着するために使用します。焚き方・使い方によって色が異なり、色が薄いほど接着力が強くなります。



胡粉 貝殻を砕いてできた白色顔料です。発色を良くするためや盛り上げるための下地、仕上げ用など様々な用途で使用します。本修復では牡蠣の貝殻が使用されています。

辰砂 黄色を帯びた鮮やかな赤色(朱色)をしています。硫化水銀からなる鉱物で、古くから赤色顔料として用いられてきました。光に当たると黒っぽく変色します。

賢者の石という別名があります。



藍銅鈹 紫みがかった深い青色(群青)をしています。高価な鉱物を砕いて作られているため、宝石に匹敵するほど貴重な「青」です。英語名はアズライトで、瑠璃色をさすラピスラズリとは別物になります。



臙脂綿 黒みをおびた深く艶やかな紅色

(臙脂色)をしており、亜熱帯に生息する虫の分泌物を精製して作られます。使用する際は膠を使用せず、水やアルコールに溶かして使用します。



代赭石 褐色を帯びた黄色または赤色(代赭色)をしており、黄土を高温で燃やして水分を取り去ったもの、または赤鉄鈹を粉砕したものです。「赭」は赤土を意味します。



藍 暗い青色(藍色)をしています。本願寺では水干絵具の藍を使用し、膠水を加えて使います。藍銅鈹は採集が困難なので藍だけを使用することもあります。

^{*}水干絵具:天然の土、または胡粉や白土に染料を染め付けた微粒子の日本画絵具です。

石黄 明るく鮮やかな黄色(雄黄)で、硫化砒素からなる鉱物です。中世頃までは黄色顔料として広く利用されていましたが、毒性があり、現代ではその供給には限りがあります。



孔雀石 明るく鈍い青緑色(緑青)です。

藍銅鈹に水分が加わり、炭酸が抜けることで孔雀石になります。日本画では緑色を表すのに欠かせない顔料です。



藤黄 少し鮮やかな黄色(藤黄)で、木に吊りし、樹脂を竹筒等で棒状に集めます。下地や混色に使用します。

